

「違和感をもっていたのに、声を発することができなかった、これまでの私」

青山キャンパス 萩原美代子 公立福生病院

1. はじめに

自閉症の青年、東田直樹氏のビデオ視聴から日頃の自分の自閉症の方に対する意識について考えさせられることが沢山あった。また「初期認知床と生きる～私たち抜きに私たちのことを決めないで」を視聴し、日頃の医療現場で認知症患者の意思決定する場面において患者さん抜きに家族と医療従事者で、物事を進める場面に度々遭遇することを思い浮かべた。ただ、そこに患者がいなことに違和感があっても、代弁者となって声を発することができていなかった。これらはなぜなのか、以下にまとめる。

2. 「自閉症の僕が跳びはねる理由」から

東田氏は怖いものを「人の視線」と話したところに衝撃が走った。自分は知らず知らずのうちに自閉症の人を見ると「可哀そうな人」と憐れむような視線を送っていたのではないかと。全ての人が起こす行動には意味があり、それは自閉症の人と同じであるということを理解できていなかった。大人のような、色眼鏡は兼ね備えておらず常にピュアにありのままに見たものを見えたように表現しているだけなのである。しかし自分はどこか「可哀そうな人」と決めつけていたところがあった。

自閉症の自分の子を受け入れられなかったミッチェル氏の気持ちが痛いほど理解でき、自分が同じ境遇であったら同じことをしたであろうと推察する。

3. 「私たち抜きに私たちのことを決めないで」から

「患者の意向を尊重しよう」日頃からそのようなカッコいいセリフを、スタッフに述べる一方で、インフォームド・コンセントするとき、「あの認知症の患者さん、ゆっくり話せば分かるのに家族しか呼ばれていない」と分かっているしながら、医師に進言できない自分がいた。ビデオのタイトルを読んだだけで、心が苦しくなった。

4. 看護師としての私にできること

2つのビデオを視聴し今後私が実践すべきことは、「相手の立場に立った考えができる」ことである。「自閉症だから」「認知症だから」という先入観は取っ払い、目の前にいる患者さんが自分や自分の家族であったらと考えれば自然と行動に移すことが可能となる。これは看護現場に限らず私生活においても同じである。

「入院したら認知症が悪化した」良く耳にする言葉である。「環境が変わったから仕方がない」と環境の責任にしていないであろうか？事務作業に追われ、本来実施すべき看護がおざなりとなり、患者さんの変化に気づけていないのではないかと？入院して褥創ができる、認知症が悪化した、医師の言いなりなどを排除し、患者さんが求める医療・看護は何なのか、患者とともに考え、決して押しつけや看護師の自己満足に陥ることなく、相手に寄り添う看護師でありたい。